

研究ノート

民法の流れ図

中山 秀 登

はじめに

- A 編と編との関係
- B 章と章との関係
- C 節と節との関係
- D 款と款との関係
- E 条文と条文との関係
- F 条文（本号，175条から177条まで）

むすび

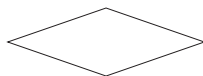
凡例



「はじめ」と「おわり」を示す。



確定事項を表す。



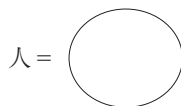
のばあいには、YはYesすなわち、「はい」を表し、
NはNoすなわち、「いいえ」を表す。

数字だけ書いてあるばあいは、条文を表し、項は① ②などと表す。

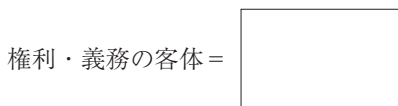
注は、(1)(2)・・・などとして表す。

個々の表題のなかで、A, B, C, D, E, Fと書いてあるときは、前掲の目次の意味を表す。

注のなかで、図をもちいて説明するばあい、図の意味は、以下のとおりである。権利・義務の主体は、人であり、人の頭、ヘルメットは、丸いので、丸で表す。すなわち権利・義務の主体＝



権利・義務の主体である、人を丸で表すのにたいし、権利・義務の客体は、何かあることであり、四角形で表す。すなわち、



人が、何かある権利を持っている、あるいは義務を負っているというばあい、人と権利・義務の客体は、線で結ばれている、と考える。そこで、つぎのように表す。

——— は、権利があることを表す。たとえば、債権。

————— は、所有権があることを表す。所有権は、たとえて言えば、太い綱である。

.....
————— 制限物権の設定は、所有権の太い綱から、一本の糸を取り出すことを表す。左図で、点線は、所有権から制限物権が取り出されている状態を表す。

+++++ は、占有権があることを表す。

----- は、義務があることを表す。たとえば、債務。

————→ は、「売る」、「買う」などの意思表示などを表す。

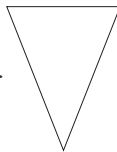


は、不動産の物権の変動の対抗要件を表す。



は、動産の物権の譲渡の対抗要件を表す。

参考までに、対抗要件を



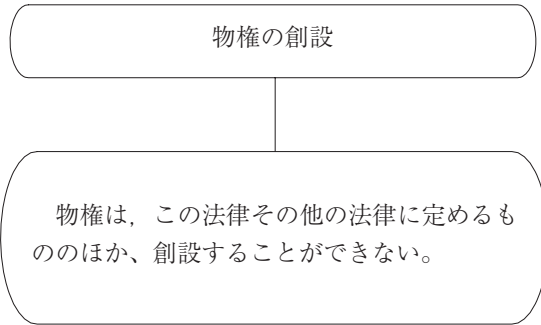
で表したのは、つぎのイメージによる。

中世ヨーロッパの騎士が、片手にもっていた盾のイメージである。相手からの、攻撃を防ぐ盾の形は、おおよそ逆三角形であった。そこで、逆三角形の形で、対抗要件を表す。もう一つ、他の例を挙げる。パソコンのゲームにあるピンボールのなかで、上から落ちてくる球を跳ね返す、クリッパーという逆三角形の道具がある。相手方の意思表示が球の動き、とすれば、球を跳ね返すのが、クリッパー、である。

第2編 物権

第1章 総則

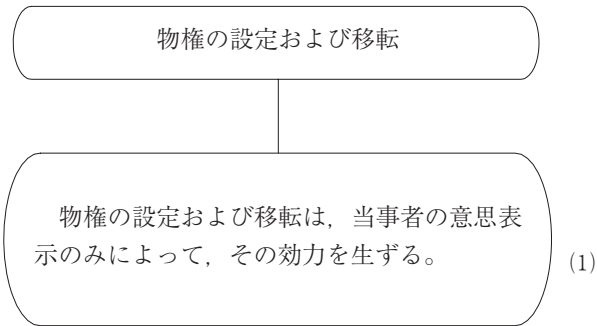
第175条 F



第2編 物権

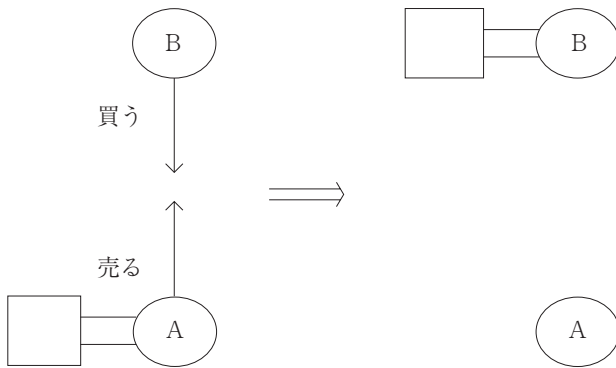
第1章 総則

第176条 F

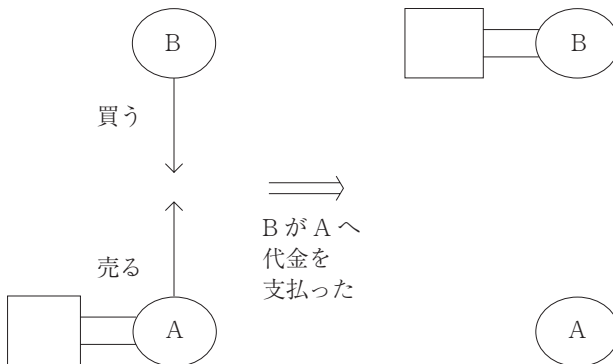


- (1) 売買契約のばあい、売主から買主へ、目的物の所有権は、いつ、移転するかについて学説が分かれている。

[契約成立時説] 高梨公之監修・口語民法，幾代通・民法事典・第三版増補138頁によると，判例・通説である。



[代金支払時説] 篠塚昭次・民法口話 2 物権法，17頁。



第2編 物権

第1章 総則

第177条 F

不動産にかんする物権の変動の対抗要件

不動産にかんする物権の得喪および変更は、不動産登記法その他の登記にかんする法律の定めるところにしたがい、その登記をしなければ、第三者に対抗することができない。(1)

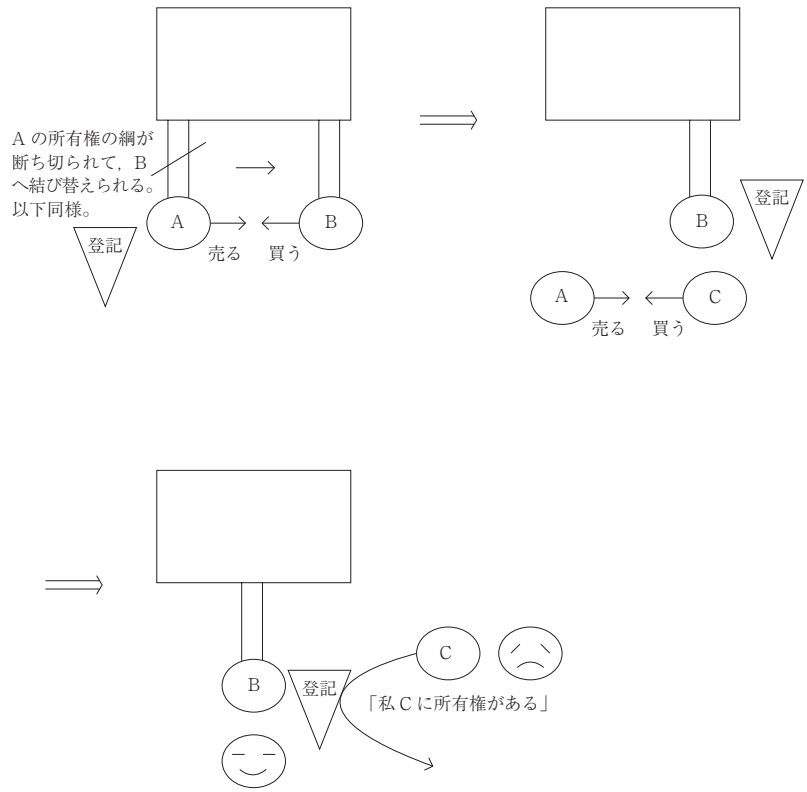
(1) 売主Aが、第一の買主Bに不動産を売った後、同じ不動産を、第二の買主Cに売ったときは、どう考えればいいのか。本稿では、無権利者であるAが譲渡する原理である、公信力説によって、図解する。公信力説については、篠塚昭次・民法口話2・物権法を参照。以下、三つのばあいを説明する。

Bが、登記を、ただちに移したばあい。

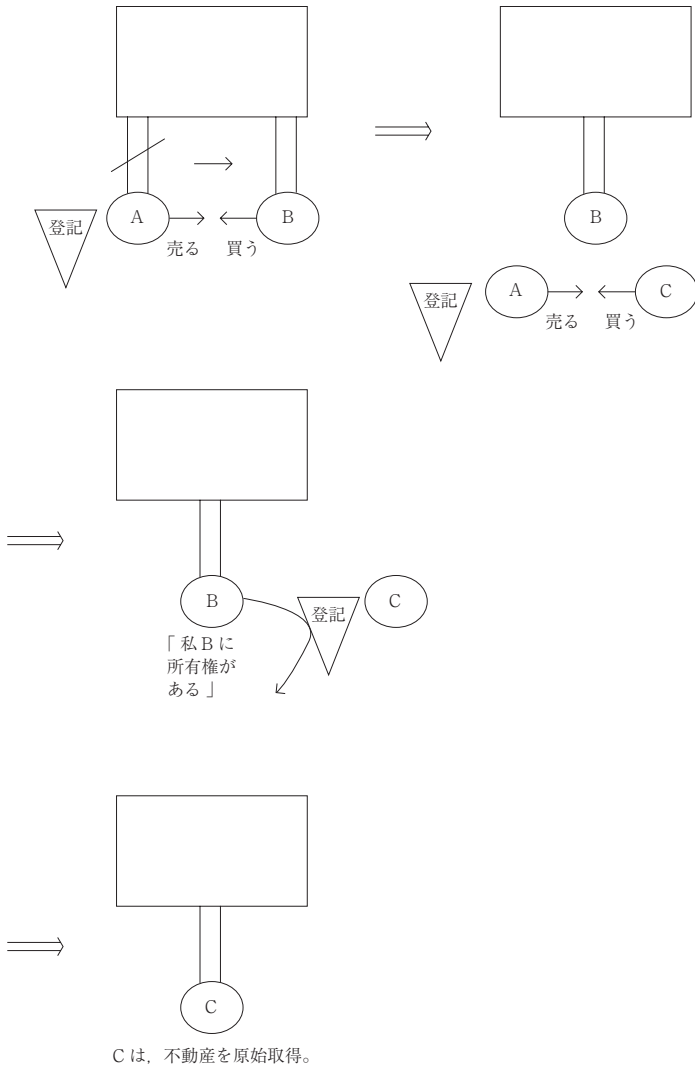
Cが、Bよりも先に、登記を移したばあい。

後者のときに、Cが、背信的悪意者のばあい。このばあい、背信的悪意者、たとえば、Bの登記を妨害した者Cにたいしては、Bは、登記なしで、対抗できることは、判例・通説である。幾代通・民法事典・第3版増補155頁参照。

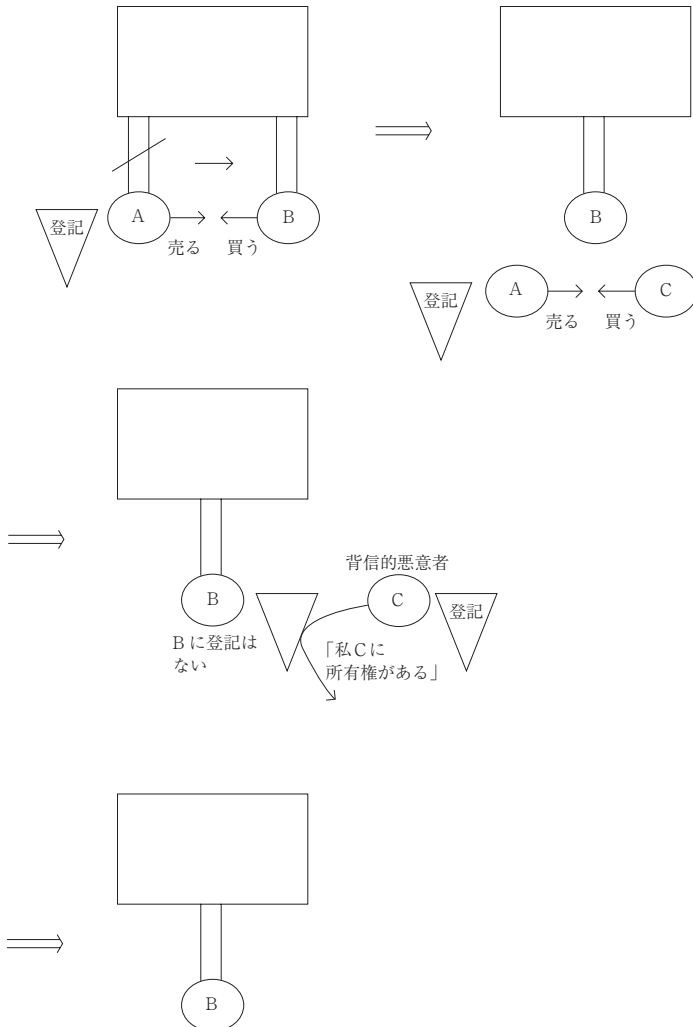
[Bが、登記を、ただちに移したばあい。]



[Cが、Bよりも先に、登記を移したばあい]



[CがBよりも先に登記を移したときに、Cが背信的悪意者のばあい]



Cは、背信的悪意者であるから、
Bは、登記なしで、Cに対抗できる
ことは、判例・通説である。